

山田原欽「萩八景詩」校勘記

鎌 田 出

一、はじめに

山口縣萩市に残る「萩八景」は、設定の時期と由來が現存する資料によって明確に確認できる貴重な八景である。また、「古地圖で歩けるまち」⁽¹⁾である萩市は、「萩八景」が設定された貞享二（一六八五）年から三百年を経て、今なお當時の景觀を現在の景觀の中に比定が可能である⁽²⁾。

「萩八景」の基本資料である毛利博物館藏「絹本淡彩八景萩八景圖卷」には、山田原欽の賛詩（五絶四首、七絶四首）が記されているが（以下、「萩八景詩」とする）、傳播の過程で諸資料間に多くの文字の異同を生じている。そこで本稿では、今後の「萩八景」研究の一助とすべく、現在入手可能な資料に基づき山田原欽「萩八景詩」の校勘を行うものである。

二 山田原欽について

山田原欽は、寛文六（一六六六）年に浪人山田時顯の次男として周防國防府に生まれた。原欽は字で、名は初めは賴忠、後に賴熙、また舜爺の名もあった。復軒、また龍山と號した⁽³⁾。『萩市誌』は、「萩における儒學興隆の基となった人」と説明する⁽⁴⁾。

十一歳の時に京に上り、宇都宮遯庵（名は三近、字は由昶。周防國岩國吉川家の儒臣）と伊藤坦菴（名は宗恕、字は元務。越前侯の儒臣）に學んだ。坦菴は、原欽の博覽強記を「異才」と稱している（『山田原欽先生事蹟』所收「復軒說」）が、果して僅か十四歳で萩藩の世子元千代丸（後の三代藩主毛利吉就）に謁見し、萩藩に仕官することとなる。

貞享元（一六八四）年、十九歳の時に藩主吉就公に侍して萩

中國詩文論叢 第三十六集

に初めて入り、元祿四（一六九一）年三月に吉就公に隨行して江戸に赴くまで、萩に關わる數多くの詩文を残している。原欽の「萩八景詩」は、この時期の作である。

しかし、江戸に到着後二年餘りが過ぎた元祿六（一六九三）年七月十四日、小倉尚齋（名は貞、字は實操。享保四年に明倫館が開館すると、初代學頭に任ぜられた）の「山田復軒先生行狀」（『山田原欽先生事蹟』所收）が「暴疾卒于東武旅館」と記す如く、原欽は江戸の藩邸で急死を遂げる。時に二十八歳であつた。後に吉田松陰は、安政六年（一八五九）正月十六日、再投獄された野山獄にあつて岡部富太郎に宛てた書簡で、原欽の死を「諫死」として、自らの置かれた狀況を山田原欽になぞらえている。

三 山田原欽「萩八景詩」の原本について

「萩八景詩」を載せる「絹本淡彩八景萩八景圖卷」（以下、『圖卷』）は、法量が縦三十九・二センチ、横九二・四・三センチの長大な卷子仕立ての繪圖である。軸箱には「八景萩八景 畫雲谷等璠 詩山田原欽作 歌安部春貞詠」と墨書されており、軸の末尾には「右八江之八景長城之佳致也 今命之題畫詩絹素詩之歌之以本章其風月云 貞享二年乙丑仲春日」との記述がある。^⑥

山田原欽の著作には、『復軒詩藁』（山口縣立圖書館藏。一卷。

安藤紀一氏が山田家より『復軒文藁』とともに借りて筆寫したものの^⑦。以下、『詩藁』、『復軒文藁』（山口縣立圖書館藏。一卷。以下、『文藁』）、『復軒遺稿』（尾高朋介氏寄贈。山口縣立圖書館藏。以下、『遺稿』）及び『龍山詩集』（香川幹雄氏所藏。軸裝五卷）がある。これらのうち『龍山詩集』は未見であるが、同書については、渡邊憲司「山田原欽の前半生」に詳し。

なお、『圖卷』に載せる「萩八景詩」は、『詩藁』では「乙丑貞享二年 時季二十」の作として「八江八景」の題で掲載され、「邦君命題」という題注が記されている。詩の掲載順は『圖卷』に同じく「倉江歸帆」に始まり「鶴江夕照」で終わっている、また、『遺稿』では「萩八景詩」の題で掲載され、「右」の形で「上津江晴嵐」から「中津江夜雨」「下津江落雁」「鶴江夕照」「倉江歸帆」「玉江秋月」「櫻江暮雪」「小松江晚鐘」の順で掲載されている。

四 山田原欽「萩八景詩」の原本について

「萩八景詩」を載せる資料は、『詩藁』及び『遺稿』以外、現時點で把握するものは以下の通りである。

①『虛實見聞記』（以下、『虛實』）

『長周叢書』所收。防長兩國の故事異聞、奇話逸傳を記す。著者は和智東郊（一七〇三～一七六五）。聽秋庵主源春信（村田峰次郎）の跋によれば、和智東郊は秋藩の儒官で、明倫館

二代學頭の山縣周南の弟子、山縣門の三傑と稱せられた。

②『長門金匱』（以下、『金匱』）

『長周叢書』所收。作者不明。萩の地名の由來や來歴、逸話を數多く載せる。看雨（村田峰次郎）の跋がある。享保年間（一七六一〜一七三六）までの記述しか見られないことから、この頃までに作られたものかと思われる。

③『御國廻御行程記』（以下、『御國』）

六代藩主毛利宗廣の御國廻りに當たり、寛保二（一七四二）年に作成された御國廻りの道筋を描いた全七帖折本仕立ての道中繪圖。萩藩の繪圖方であった有馬喜惣太と岩崎四郎兵衛が中心となり作成された。山口縣文書館毛利家文庫に所藏。防長兩國の領内巡見（御國廻り）の道筋の景觀を詳細に描くとともに、名所、舊跡等に關する由來書を載せる。なお、同資料については山口縣文書館編集『繪圖で見る防長の町と村』（山口縣文書館 一九八九）所收の「玉江（二六七頁）」「椿西（二六九頁）」「椿東（二七三頁）」「小畑（二七五頁）」を参照した。

④『行程記』（以下、『行程』）

萩博物館所藏の明倫館舊藏本。③の異本で、描寫方法は③に同じであるものの、御國廻りの道筋とは部分的に異なっている。赤間關街道北道筋を描く本圖は、もともと萩から赤間關までの行程を描くものであったが、現在は萩から深川湯本

山田原欽「萩八景詩」校勘記（鎌田）

までの行程を描く「從阿武郡河嶋庄至岡枝村」（七冊之内）一帖のみが残る。¹¹⁾山田稔氏は、本圖の制作者が複數に及び、制作時期は文化九（一八一二）年であるとする。¹²⁾なお、毛利文庫に所藏される『行程記』には萩から江戸に至る參勤交代路を描いた『行程記』（全二十三帖）があり、これは③とは異なる街道繪圖である。¹³⁾

⑤『防長風土注進案』（以下、『風土』）

周防長門兩州に關する地誌。萩藩主毛利敬親が、村田清風らによる天保の改革の一環として各宰判の代官に命じて提出させた各村の沿革・地理・産業等の明細。國學者の近藤芳樹（一八〇一〜一八八〇）が總監修となり『風土注進案』としてまとめたもの。昭和三十五（一九六〇）年に山口縣文書館の文化出版事業として編集・校訂の上刊行された。なお、刊行に當たり原題に「防長」の二字を冠している。

⑥『山田原欽先生事蹟』（以下、『事蹟』）

『長周叢書』所收。山田原欽の事蹟を後世に傳えるために村田峰次郎が編輯し、明治二十三（一八九〇）年に刊行された。後序に據れば、「毛利家記録無盡集」「虛實見聞記」「清江記」「長門金匱」「笠原半九郎君藏本」「白根勝二郎君藏本」「木川榮一君藏本」等に基づいて編輯したとする。

⑦『八江萩名所圖書』（以下、『圖書』）

木梨恆充著述、山縣篤藏補正の七卷本（一之卷〜六之卷、

中國詩文論叢 第三十六集

附錄)。明治二十五(一八九二)年に刊行された。萩の寺社佛閣、名所等について挿繪を交えて記述する。序題には「八瀨城名所圖書」と記されている。木梨恆充は、天保五(一八三五)年に本書を起草したが、草稿の段階で安政二(一八五五)年に不慮の事故に據り死去した。⁽¹⁾大和綴の小型本(A6判)であったことから、利用者の便を圖りB5判に拡大した洋本として一九九〇年にマツノ書店より復刻刊行された。なお、この復刻版には郷土史家の松本二郎氏による訓讀と注釋が別冊として加えられており、『圖書』と區別して『別冊』とする。

五 山田原欽「萩八景詩」における文字の異同

『圖卷』所收「萩八景詩」における文字の異同箇所を□で示し、具體的な異同内容については一覽表を添付する。なお、異體字は異同として扱わなかった。⁽²⁾

(1) 『圖卷』本文異同箇所

倉江歸帆

地挹遠天三面開

水浸數島

帆廻

倉江風熟潮生駛

疑是仙

查銀漢來

玉江秋月

玉江一片秋

明月入晴流

夜靜人回首

漁村烟霧收

櫻江暮雪

雪滿櫻江更問津

晚來舟子訝行人

風回偏惜入波碎

楫轉何

妨壓笠頻

小松江晚鐘

斷霞夕峯

深寺度疎鐘

縵縵春江水

平吞樓外松

上津江晴嵐

上津江上數秋霖

度嶺嵐光浮沈

旋與扁舟傍灘落

日登

丈五翠猶深

中津江夜雨

雲氣四山橫

渡頭雨暗生

蕭然不能寐

一夜打簾聲

下津江落雁

旅雁秋高停未征

一汀水氣接天清

問渠緣底謾來去

不耐寒

江萬里情

鶴江夕照

斜陽宜曬網 一半鶴江紅

島影委波永

寒潮湧遠空

(2) 異同内容一覽表

	圖卷 該当箇所	異 本									
		詩藁	虚實	金匱	御國	行程	風土	事蹟	圖畫	別冊	遺稿
倉江歸帆	浸			漫		漫			漫	漫	
	島								鳥	鳥	
	廻								回	回	
	駛				駛	駛	駛				
	査					臺		楂	楂	楂	
玉江秋月	晴	清	清	清			清	清	清	清	清
櫻江暮雪	櫻					樓					
	問			向							
	子								早	早	
	波			江					浪	浪	
小松江晚鐘	竹								繞	繞	
	縵		漫	漫			漫	漫	漫	漫	漫
	吞						含				
	松							船			
上津江晴嵐	斂		斂	斂			斂	斂	斂	斂	斂
	度									渡	
	嶺			嶽			峯	嶽			
	乍			卽							
	登										升
中津江夜雨	山								方	方	
	四山横						横四山				
	雨				兩	兩					
	暗				晴						
	寐			寢						寢	
下津江落雁	未			不							
	清			晴					晴	晴	
	緑									緑	
	謾	漫		漫			漫	漫			
	耐			堪							
	寒			雲			雲				
	曬						曝				
鶴江夕照	紅				(紅字を缺く)						
	波				(波字を缺く)				浪	浪	
	永						寒		水	水	

六 校勘結果を踏まえて

「一覽表」の結果を a…字形の類似による誤記と思われるもの、b…通用字を用いたもの、c…語義の類似による置き換えと思われるもの、d…別の字を用いたもの、e…その他、の五つに分類し「圖錄の該當箇所―異同内容」の形で示す。

- a…①「浸―漫」、②「島―鳥」、③「駛―駛」、④「晴―清
(清―晴)」、⑤「櫻―樓」、⑥「問―向」、⑦「縵―漫」、
⑧「吞―含」、⑨「斂―斂」、⑩「雨―雨」、⑪「暗―晴」、
⑫「緣―綠」、⑬「寒―雲」、⑭「永―水」
- b…①「廻―回」、②「謾―漫」

- c…①「查―楂・槎」、②「波―浪」、③「度―渡」、④「嶺―
峰・嶽」、⑤「登―升」、⑥「寐―寢」、⑦「耐―堪」、⑧
「曬―曝」

- d…①「查―臺」、②「子―早」、③「波―江」、④「竹―繞」、
⑤「松―船」、⑥「乍―即」、⑦「山―方」、⑧「未―不」、
⑨「永―寒」

- e…①「四山横―横四山」

先ず a であるが、江戸時代は「出版文化の時代」⁽¹⁶⁾であったが、堀川貴司氏が述べる如く、「さまざまなテキストが版本で流布するようになった近世においても、寫本の制作や享受は根強く⁽¹⁷⁾續いて」いた。寫本にはどうしても誤記が伴う。所謂「魯魚の

誤り」であるが、詩意の通じる場合もあれば①、③、④、⑥、⑦、⑧、⑭) 通じなくなる場合もある②、⑤、⑩、⑪、⑫、⑬)。また、⑨のように誤記がそのまま一般化する場合もある。⁽¹⁸⁾村田峰次郎が『輝元公上洛日記』(『長周叢書』所收)の跋に「たまたまこれもあるも蠹殘の古寫本にしてもとより傳寫のあやまりのみ」とするのも、寫本に纏わる誤記の事情を述べたものである。このような點からも、「秋八景詩」において原本たる『圖卷』が存在している意義が再確認される。

なお、『圖卷』と『詩藁』とが相違する④については、『御國』『行程』以外すべて「清」に作る。これは、繪圖方の據った資料が『圖卷』系のものであった可能性が示唆するもの⁽¹⁹⁾と言える。なお、「晴流」は『大漢和辭典』(大修館書店 一九五五)に載せない語彙であるが、山田原欽「高臺臺夕照」(『復軒詩藁』貞享四年)に「微陽冉冉下晴流、一半高臺照未收」という用例がある。

b は、①は「めぐる(向きを變える)」意で、②は「みだりに(とりとめなく)」意でそれぞれ通用する。⁽²⁰⁾

c については、書寫ではなく読み下しの過程において主として發生した異同と考えられる。ほぼ同義の語に置き換えられているため、詩意に大きな變化は生じていない。『金匱』⑥・⑦、『風土』④・⑧、『事蹟』①、『圖畫』①・②、『別冊』①・③・⑥、『遺稿』⑤) に見えるが、『別冊』の①・③・⑥は、

『圖書』解説上の必要性から置き換えられたものであろう。

d 及び e については、字形の類似、語の置き換えの必然性ともに乏しく、それぞれのテキストが依據した資料を反映したものとと言える。また、異なる異同が各本に散見することから、テキストの系統化は困難である。そうした中で、『金匱』には d・d⑥・d⑧の三箇所、a 及び c を加えて合計一四箇所、『風土』には d⑨、e①の二箇所、a 及び c を加えて合計一箇所、『圖書』（『別冊』を含む）には d②・d④・d⑦の三箇所に a、b 及び c を加えて合計一四箇所（『別冊』を含めると一七箇所）の異同が見える。『金匱』における異同の多さは、『萩八景詩』成立以降、その傳播の過程において早い段階で様々な文字の異同が生じていたことの査證と言える。また、『風土』と『圖書』における異同の多さは、幕末・明治期に至る二百年間に「萩八景詩」がその本来の姿を更に變貌させていたという事實を示している。「萩八景詩」成立から三三〇年を経た今日において、繰り返しになるが、「萩八景詩」本来の姿に基づく對照分析が可能であるのは、『圖卷』の恩恵に他ならないのである。

なお、『行程』に見える d①は、『御國』と同じく繪圖方の繪圖でありながら、詩意を大きく變化させる異同であり、未見の「行程記」との比較検討が今後の課題である。

山田原欽「萩八景詩」校勘記（鎌田）

七 おわりに

日本における「八景」は、中國の「瀟湘八景圖」と「瀟湘八景詩」を起源に持ち、一三〜一四世紀に日本に移入され、禪僧から公家・大名へと享受層を擴大して行く。そして「萩八景詩」が作成された江戸時代に至り、日本國內の「八景」は量的・空間的に飛躍的に擴大する。その背景については、先行研究の明らかにするところであるが、あわせて検討すべきは、「瀟湘八景」という文化的景觀が、どのようにして日本の現實の景觀に「見立て」られたか、という点である。

見慣れた景觀が、鑑賞するに足る風景——ここでは「瀟湘八景」の文化的景觀——として認知されるには、二つの要素が介在していた。一つは「繪畫」であり、今一つは「詩歌」である。しかし、例えば金澤八景がそうであるように、數百年の春秋を経て「見立て」の對象となった景觀が大きく損なわれてしまい、「繪畫」や「詩歌」との繋がりを見出せない場合も多い。これに對して「萩八景」は、設定時に描かれた繪畫として「絹本淡彩八江萩八景圖卷」、そこに記された「萩八景詩」、さらには江戸時代と變わらぬ景觀という三者を有する貴重な八景であり、その文化史的意義は高い。また、今も人々がそこに暮らす「生きられる景觀」でもある。日本各地の八景は、それぞれの土地に對するトポフィアが生み出した風景と言える。今日におい

中國詩文論叢 第三十六集

てなお、新たな八景が生み出されているのも、それぞれの土地に暮らす人々のトポフィリア無しには考えられない。「萩八景」は、そうした風景生成の原動力を、三百年の時を越えて語りかけてくれるのである。

【注】

- (1) NPO 萩まちじゅう博物館ホームページ (<http://machihaku.city.hagi.lg.jp/>) 参照。
- (2) 拙稿「萩八景序論—日本における瀟湘八景定着過程を考察する手がかりとして—」(『中國詩文論叢』第三十二集 二〇一三) 参照。
- (3) 山田原欽の傳記に關しては、安藤紀一編『山田原欽』(明倫館同窓會 一九四〇) 及び渡邊憲司「山田原欽の前半生」(『山田原欽の死』) ともに『近世大名文藝圈研究』(八木書店 一九九七) 所收) に詳しい。
- (4) 萩市誌編纂委員會『萩市誌』(萩市役所 一九五九) 四一三頁
- (5) 『吉田松陰全集』(第六卷 岩波書店 一九三五) 一九二頁
- (6) 同圖卷については、平成二十年(二〇〇八)十一月八日に當時毛利博物館の館長職にあった小山良昌館長のご厚意により實物を閲覧する機會を得た。また、同圖卷の讀み取

りに關しては、小山館長が史都萩を愛する會編集・發行『新史都萩』(平成二十一年一月一五日發行) に寄せられた「『八江覇城名所圖書』の正誤について」を参照させて頂いた。

- (7) その經緯については、『復軒文藁』末尾に付された「跋寫本復軒詩文藁」に記されている。
- (8) 前掲(3)『近世大名文藝圈研究』所收。
- (9) 村田清風の孫にあたる村田峰次郎(安政四(一八五八)年、昭和二〇(一九四五)年 名は春信で、看雨と號した)が、蒐集した萩藩に關する資料を明治二五(一八九二)年に刊行したもの。全二〇冊。『長周叢書解題目錄』の「長周叢書刊行の趣旨」によれば、「普く逸書を出版して千載保存の業を圖らんとす」るものであった。長らく希書であったが、平成三(一九九一)年にマツノ書店より洋装二冊本として復刻刊行された。
- (10) 山田念『御廻御行程記』とその異本について(『山口縣文書館研究紀要』第二五號 一九九八) 参照。
- (11) 平成二九年十二月も押し詰まった二六日に、萩博物館清水満幸館長のご厚意により閲覧する機會を得た。その折には、道迫眞吾主任研究員、平岡崇學藝員、更には萩松陰神社寶物殿の樋口尚樹館長の御手をも煩わせることとなった。ここに改めて感謝申し上げる次第である。
- (12) 前掲(10) 参照。
- (13) 山田念「近世街道繪圖『行程記』の路線圖について」

- 『山口縣文書館研究紀要』第三六號 二〇〇九) によれば、萩を含む行程記には「行程記 從阿武郡萩唐樋札場至防國佐波郡三田尻 登り一」(毛利家文庫地誌四一 〇二五の一)「行程記 從萩至小瀬」(毛利家文庫地誌四一 〇二五の二四)「行程記 從萩唐樋札場至三田尻」(東光庵所藏。毛利家文庫地誌四一 〇二五の一)の寫本)があるものの未見。
- (14) 『八萩名所圖畫 付録』所收松本二郎氏の「解題」に據る。
- (15) 文字の書體については、藤原鶴來編『新書道字典』(二玄社 一九八五)を参照した。また、異體字の判別については大東文化大學の上地宏一氏が運用管理する「漢字字形自由共有サイト グリフウィキ」を参照した。
- (16) ピーター・コーニッキー「江戸時代の寫本文化考」(公益財団法人日本學術協力財團『學術の動向』二二卷 六號 二〇一六)
- (17) 堀川貴司『書誌學入門』(勉誠出版 二〇一〇) 一七七頁
- (18) 戸川芳郎監修『漢辭海』(三省堂 二〇〇三)では「斂」について「古籍のなかでは『斂』を『斂』と書き誤ることがある」と説明している。
- (19) ①「暗―晴」については、『繪圖で見る防長の町と村』(二四一頁)に據るが、『圖卷』の字形からは「暗」とも判讀できる。他の諸本が全て「暗」であることから、これは「暗」である可能性が高い。
- (20) 『大漢和辭典』「廻」(卷四)及び「謾」(卷十)による。
- 山田原欽「萩八景詩」校勘記(鎌田)
- (21) 武瀟瀟『瀟湘八景』の傳來に關する新知見…平安時代における瀟湘イメージを中心に」(大阪大學『デザイン理論』第七〇號 二〇一七)によれば、中世日本において瀟湘八景が大流行した背景には、平安時代においてその「文化的な土臺が築かれていた」ことがあるとする。
- (22) まとまったものとしては、堀川貴司『瀟湘八景』(臨川書店 二〇〇二)第二講「近世における普及」がある。
- (23) 前掲(22) 参照。
- (24) 樋口忠彦『日本の景觀 ふるさとと原型』(筑摩書房 ちくま學藝文庫 一九九三)「第三章 生きられる景觀」に據る。
- (25) 拙稿「白居易の愛した風景―杭州『西湖』へのトポフィリアー」(『中國詩文論叢』第十七集 一九九八) 参照。